

二〇二五年 聖典に親しむ会 五月二十四日(土)

午後発表 東京班

発表者と範囲 『真宗聖教全書』「往生論註」

一、 田中郁雄 不虛作住持功德 (p 303 終わりから3行目～ p 304 4行目)

二、 音石和男 同右

三、 佐々木玄吾 同右

四、 赤秀品枝 菩薩功德 (p 304 5行目～ p 306 3行目)

五、 佐藤 展 菩薩功德 (p 306 4行目～ p 307 終わりから6行目)

仏の本願力を観ずるに遇あうて空しく過る者無し、能く速に功德の大宝海を満足令むと。

此の四句は莊嚴不虛作住持功德成就と名づく。仏本何が故に此の莊嚴を起こされたのか。有る如来の世界を見るに、声聞僧だけがいて、無上菩提の仏果を求めようとする者がいない。あるいは、折角この世にお出ましになった仏にお会いしながら、仏を謗つたために、三惡道に堕ちてしまう者がいる。善星比丘や提婆達多、居迦離（たかり）等である。

また、仏の名号を聞きて、無上道心を起こしながら、惡の因縁に遇つたがために、声聞地や辟支仏地に入ってしまった者がいる。こうした空しく過ぎる者、樂処から、苦処に墮落する者のいる様子をご覧になった。この故に、願じていわく。私が仏になった時、我に値遇せる者に、皆速やかに功德の大宝海を満足せしめたい。こうして成就された莊嚴がこの不虛作住持功德ということである。

浄土は阿弥陀仏の虚妄ならざる智慧・本願力によつて住持（保持）されているから、娑婆世界のもののように、仏にお会いしても三塗（地獄・餓鬼・畜生）に落ちてしまつたり、声聞や辟支仏と言つた低い境地に入ってしまうことはない。必ず無上菩提に至ることができるのである。

この功德は浄土の阿弥陀仏に出会つての功德であるから当益である。しかし親鸞聖人は「一念多念証文」に

「観」は願力を心にうかべみると申す。またしるという意なり。「遇」はもうあうという。もうあうと申すは本願力を信ずるなり。

「本願力を信ずるとは」他力回向の信心を得ることである。また、「信心あらん人、むなしく生死にとどまることなしとなり」と、必得往生を得るということになる。

深励が「遇無空過者」以下の三句は第十八願の利益なりと述べている。「功德大宝海」というものも名号のことになっている。「本願力を信ずる端的に時をへだてず日をへだてず念をへだてず速に不可称不可説の功德は行者の身にみつる」現益と理解されている。釈文の「仏の名号を聞きて無上道心を発す」は真宗的には、現生の事であるし、他力の信心をたまわつたことになるので、こういった解釈がなされるのであろう。

けれども、今は浄土の功德である。浄土で阿弥陀仏に出会つた者は、空しく過ぎることなく、必ず無上菩提の功德大宝海を得る身になるというのである。

【語句】

善星比丘・提婆達多・居迦離の三人は仏法に縁のない人で、断善根であると釈尊はわかつていたので、出家させて、今はよく戒を持つているからそれでいいではないかと、釈尊は言われたのである。

仏莊嚴の残り四つ、大衆功德、上首功德、主功德、不虛作住持功德をあげているが、偈文を上げているだけで説明がない。浄土論註だけは丁寧に説明をしている。

不虛作住持功德成就とは簡単には、阿弥陀如来の本願力なり。今まさに略して、虚作の相の住持すること能はざるを示して彼の不虛作住持の義を顕わす。

この現実世界では自分の食をさいて、弟子を養うなどして他人のために、努力を重ねても、かえって自分が船の中で殺されてしまった。（『呉越春秋』卷二や『呂氏春秋』卷十一に出る呉の要離と衛の慶忌の話）。又、『前漢書』卷九十三の話であるが、漢の文帝に寵愛されて鄧通は並びのない富貴になり、金は蔵に満ちた。しかし、文帝が死ぬと、次の景帝から罪を得て、財産を没収されてしまった。それで彼は餓死してしまったと言うのである。

こういうことは世の中によくあることである。得たようでも、本当に得ていない。在ってもその在ることを守ることができない。全て虚妄の業で為したことは、私たちを本当に保持する力にはならない。

これを虚作による住持とすれば、不虛作、虚妄ならざる保持する力として、阿弥陀の本願以外にない、と言うわけである。

不虛作住持とは、本法蔵菩薩の四十八願とその果徳としての阿弥陀如来の自在神力とによって住持されている。これを何故不虛作と称するかといえば、因としての願はすぐれていて、少しも無駄がない。果として出来上がった仏力は虚妄な所は一つもない。このように願と力とが相応している阿弥陀仏であるから、この願と力によって、私たちの往生も成仏も可能になるわけで、これが恵まれる確実性を意味して「不虛作」と言うのである。

（参考書・「曇鸞『往生論註』の講究・相馬一意著」・「講讃浄土論註第五卷」延塚知道著）・「解説浄土論註」・箕輪秀邦編・東本願寺）

【感想】

上巻の総説文で「不虛作住持功德」を総説して、法蔵菩薩の四十八願と今日の阿弥陀如来の自在神力とによって功德が成就したのである。下巻では本願力に遇った者は本願力によって必ず往生も成仏も可能になるということであります。私たちの世界では必ずということとは言えませんが、浄土の「不虛作住持功德」は仏にお遭いした者は必ず、仏になるのです。このことに感銘を受けました。

不虛作住持功德を考える

東京支部 音石和男

1. 不虛作住持功德は、二十九種莊嚴功德の中心

(中心と言える理由は)

・「願生偈大意章」に「此の願偈は何の義をか明かす。彼の安樂世界を觀じて、阿彌陀如来を見たてまつり、彼の国に生ぜんと願することを示現するが故に」と説かれるように、「願生偈」の目的は「見仏」にある。それが、不虛作住持功德「觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」の仏に「遇う」ことにおいて実現する。

・浄土の菩薩に、仏莊嚴功德七種が開かれた後に、不虛作住持功德での見仏を得て、菩薩の四莊嚴が開かれる。還相の菩薩となって生死園・煩惱林に還つて教化していく。分岐点。

(「教行信証」での位置付け)

・「行の巻」 「願生偈」の偈文全体を、「成上起下」の文(我依修多羅 真實功德相 說願偈總持 与仏教相應)と不虛作住持功德の文でもって代表させる。

・「行の巻」一乗海釈での引用(後出)

・「証の巻」 還相回向釈での引用

・「真仏土の巻」 「浄土論註」からの六引文最後の集約(後出)

(「入出二門偈」での確かめ)

不虛作住持功德を「觀彼如来本願力 凡愚遇無空過者」と書き換え、菩薩道の完成である功德が、凡夫の上にも(にこそ)成就することが明らかにされる

(「尊号真像銘文」での確かめ)

「觀仏本願力 遇無空過者」よりも、「能令速満足」に重点をおいた引用(星野元豊)

(和讃・高僧和讃)

本願力にあいぬれば 空しくすぐるひとぞなき 功德の宝海満ち満ちて 煩惱の濁水へだてなし

2 「真仏土の巻」での「論註」からの引用と其中で不虛作住持功德の位置付け

浄土の功德は、因(本願)果(力) 一体(因果相即、因果同時)となって用らく(下表)

3. 不可思議願力成就				2. 性功德(上巻)	1 清浄功德(下巻)	
不虛作住持功德(下巻)		自利 利他示現(下巻・觀察体相)	五種不可思議力(下巻)			
願以て力を成ず。力以て願に就く。願徒然ならず。力虚設ならず。力願相い符つて畢竟して差わざるが故に成就と曰う。	本法蔵菩薩の四十八願と	(国土十七種莊嚴の不可思議は)如来の自身利益第大功德成就と利益他功德成就を示現したまえる。 能神 の者の 神 ならくのみ。(神力は、法蔵菩薩の大願業力と阿弥陀仏の住持力)	一つには業力、謂わく、法蔵菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり	仏、本願の不思議の 神力 を以て、摂して彼に生ぜしむるに	序め法蔵菩薩、世自在王仏の所にして無生忍を悟る。爾の時の位を聖種性と名づく。是の性の中に於いて四十八願を發して、此の土を修起したまへり。即ち安樂浄土と曰う。是れ、彼の因の所得なり。果の中に因を説く。故に名づけて「性」とす	因
	今日の阿弥陀如来の自在 神力 に依る		二には正覺の阿弥陀法王の、善く住持(不異不滅、不散不失)力をして摂したまう所なり。	必ず当に 神力 を以て、其れ(声聞)をして無上道心を生ぜしむべし。		果
					凡夫人煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得るに、三界の繫業、畢竟して牽かず(↓三在釈)、則ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。 (↑その前の「涅槃經」の引文、浄土は涅槃の世界を受けて)	

不可思議なる浄土の徳は、涅槃・一如・空。衆生は因果次第に分別しないと受け止めることができない。しかし、それは因(本願)と果(力)が、一体(同時、相即)となって私の上に用らくことを示すのが真仏土巻の引用文。不虛作住持功德は、その結論的な位置付けにある。

安田理深「教行信証 真仏土巻聴記」P130

「仏土は果のみではない。このような構造を二つに分解するのはただ分数的にいわれるのではない。因果の交互性を示すにある。因果は構造、交互は動的関係であることを示す。一方的でないわけである。円環を画している構造だから力が出てくる。力は *force* である。はたらくものである。南無阿弥陀仏も浄土も静止的に考えると符号になる。そうではなく招喚摂取の用である。単なる名詞ではない。動詞である。国土も単なる場所でない。一切を包み、一切を改変する場所である。一切の *ego* を包み超え占める。願力は包むはたらき、この包んだ衆生を(たとい女人・根欠でも)変革する。よって、(1)業力ー包む(2)善住持力ー超え占める。つまり包越する。浄土は交互因果の円環的な *work space*(所謂電磁気のエネルギーの場所と言ってもよい)である。仕事を可能性として包んでいる場所、エネルギー(可能性)を持つ場所である。このエネルギーを願といい、仕事を仏力という。仏力の仕事を願力のエネルギーとして持っている場所が浄土である。」

3「行の巻」一乗海釈での引用

・「行の巻」に引かれている意味

見仏によって「遇う」のは、南無阿弥陀仏の名号だということを明らかにする。

「讃嘆門」「彼の如来の名を称し、彼の如来の光明智相の如く、彼の名義の如く、実の如く修行し相応せんと欲うが故なり。」と呼応している。

・「一乗海釈」に引かれていることの意味。

一乗海釈は、「他力と言うは、(因果一体となつて用らく)如来の本願+力なり」とされる他力釈の展開であり、不虛作住持功德の実現でもある。

他力真実の教えはただ一つの誰にも等しく開かれた成仏へ至る教え(一乗)だが、自力の教えは、機根に応じて、二乗・三乗といく通りにも別れる。不虛作住持功德が説かれた背景が、

「有る如来を見そなわすに、但声聞を以て僧と為す。仏道を求むる者無し。或いは、仏に値石かども三途を勉れざる有り。善星・提婆達多・居迦離等是れなり。又、人の名号を聞きて無上の道心を発せども、悪の因縁に遇いて退いて声聞、辟支仏地に入る者あり。是の如き

等の空過の者、退没の者あり」

とされ、自分の我執に囚われ二乗などに迷ってしまう空過・退没の者をも無上の宝海（名号）で満足させられる功德が成就した。

・「海」の意味

不虛作住持功德の「大宝海」の註釈として、清浄なる智慧の海より生ずることを「示すため、仏功德の衆功德が引かれる。

「海とは、仏の一切種智深広にして崖無く、二乗雜善の中下の死骸を宿さざることを言うに、之を海の如しと喩う。是の故に、『天人不動衆・清浄智海生』と言えり。不動とは、彼の天人、大乘根（心）を成就して傾動すべからずと言うなり。」「浄土に生きる者は不動の心が得られる。それは大きな智慧の海のはたらきによるものだ。」

個人的には、この引用の代わりに性功德の「性は是れ必然の義なり。海の性の一味にして、衆流入れば必ず一味となりて、海の味彼に随つて改まざるが如しなり」の方がしっくり来る。「一乗海釈」なので、「二乗雜善」がなくなると言う衆功德が引用文として選ばれたのか。

以上

一、上巻と下巻をいっしょに読むのがよい。(理由)

1. 三蔵二十九種莊嚴

上巻(因) 仏本(もと) 何が故ぞ此の莊嚴を起こしたもうや

仏はもと、どうしてこの莊嚴を起こしたもうかというと。

下巻(果) 此れ如何が不思議なるや

これはどのような不思議(な莊嚴)なのであろうか。

2. 下巻 言う所の不虛作住持とは本法藏菩薩の四十八願と今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。

願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願相い符つて、畢竟じて差わざるが故に成就という。

二、還相の廻向とは善知識の教化である。善知識の教化を受けて私は鬼じゃと懺悔することという。(自力の心) 20 / 6

1. 二十二願還相廻向の願をどう読むか。

(御本典の文)

謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり。一つには往相。二つには還相あり。往相の廻向に就いて真実の教・行・信・証有り。(12 / 3) 教巻

二つに「還相の廻向」と言うは、則ち是れ利他教化地の益なり。則ち是れ必至補処之願より出でたり。亦「一生補処之願」と名く。亦「還相廻向之願」と名く可きなり。『註論』に顕れたり。故に願文を出さず『論の註』を披く可し。(12 / 122) 証巻

A 従来の読み方

往相の廻向も還相の廻向も一人の行者自身が大悲廻向の利益として得る。自分のところには往相廻向も還相廻向もどちらもあるのだと理解されていました。

B (延塚知道先生) の読み方

「還相の廻向は、『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり』という『よきひと』を浄土から還つて来た諸仏菩薩と仰ぐ。これが親鸞の二種廻向の領解です」(『講讃浄土論註』第五巻 p 210)

私の感想

一、上巻と下巻と一緒に読むのがよい。

二、還相の廻向は善知識の教化である。

これまで国土莊嚴功德と仏莊嚴功德を観じてきた。その上なぜ菩薩の莊嚴功德を観ずる必要があるのかという問いに対して、どのような名君のもとにも必ず賢い家臣がいるようなもので、阿弥陀如来の働きを表すためには菩薩たちが存在しなければ我々の所まで届かないからである。薪が少ない時には火も大きくならないようなもので、阿弥陀の働きは火と同じで菩薩の働きによつておおきくなる。

阿弥陀如来の働きとは光明無量、寿命無量である。具体的にはお念仏申すところに、菩薩莊嚴が存在する。阿弥陀を憶念し、名号を称える者への働きとして菩薩四種莊嚴が展開される。譬え法花経普門品に

針に糸を通せない目の悪い比丘阿那津の話

「だれか針に糸を通して下さい」と阿那津がたのむと釈尊がすぐに立ち上がつて針に糸をとおした。阿那津が「あなたはもう十分に功德をしているのになぜまだ功德をされるのですか」と聞くところがあります。功德はこれで十分ということはないのです。じつとしてられないのです。

海の中に川の水が流れ込んでもこれでやめようということはないのと同じであらゆる人を助けたいという慈悲と智慧の心はどこまでも流れている。

① 安樂国は清浄にしてつねに無垢の輪を転ず 化仏菩薩の日須弥の住持するが如し

阿弥陀の浄土は清浄で煩惱が一切雑わらない。仏菩薩は太陽のように動かないで、太陽の光がすべてにそそいでいる。世界中に教化している。阿弥陀仏の悟りは須弥山のように動かない

阿弥陀如来がどうして菩薩莊嚴をたてたかというと、釈尊の弟子は数多くいるが、それらは小菩薩で世界中に教化しても広まらない。あるいは声聞や人天がいるばかりで世界が狭い。阿弥陀如来が本願を建てられた。我が国の無量の大菩薩がいて、阿弥陀の悟りから動かないままに世界中に利他教化するような菩薩が出てくることを願われた。

小菩薩…七地沈空の菩薩

菩薩…八地以上の菩薩

大集経の譬え

池の堤に水をためて頃合いを見て放水すると自然と田畑がうるおされる。菩薩もこのようなもので身も心も動かさないで教えのまま仏の行をなすことができる。

菩薩の行は如実修行である。如実修行とはぎょうじても行じたことにならない。行じなくても行じたことになる。菩薩とは具体的には善知識である。念仏の人は存在そのものが教化していく力を持っている。

私の上に念仏を届けて下さった善知識をみると、その人が法蔵菩薩である。法蔵菩薩となつて私に本願をとどけてくださった。

下巻

何者か四とする。一には一仏土にして身動揺せずして十方に遍じて種々に応化して実の如く修行して常に仏事をなす。偈に、「安樂国は清浄にして無垢の輪を転ず

化仏菩薩の日須弥の住持するが如し 諸々の衆生汚泥偈を開くが故にと

一仏土にしては阿弥陀の浄土が立脚地である。

下巻ではこの法蔵菩薩は八地以上の菩薩であり、常に悟りの世界にあつて、休むことなく教化してくださる。そして、念仏三昧に住して阿弥陀の本願、悟りの世界から動かないそして、菩薩も大菩薩（天親にとつては龍樹・天親、私を導いてくださった先生）も休むことなく教化していてくださる。

法身（阿弥陀仏）は太陽であり、応化身（菩薩・善知識）は光であつて世界中にふりそそいでいて下さる。法身は智慧のひかりであり、如来に背き続けている私がここにいてという目覚めである。阿弥陀仏は太陽にたとえるだけでなく、須弥山のように阿弥陀如来の悟りから動かない。大菩薩は凡夫を救うために煩惱の泥田の中で教化してくださっている。阿弥陀の本願を生きた大菩薩の一番目の働きは須弥山のように阿弥陀如来の覚りから動かないということ。

菩薩と大菩薩のちがいが曇鸞が尊敬している人龍樹。天親のこと

自分の善知識となつて私をみちびいてくださった先生のこと

② 無垢莊嚴の光一念および一時に普く諸仏の会を照し諸の群生を利益すと

無垢莊嚴の光とは智慧の光のことであり、他方無量の諸仏を供養しようと思ひ、無量の衆生を教化しようと思つてもどちらかを先にしなくてはならない。動かないで世界中に出るとしてもどちらかを先にし、どちらかを後にしなくてはならない。不動を實現しながら世界中に出るということは一念一時でなければならぬ。すべてを照らさなければならぬ。前述の菩薩莊嚴①。は動かないと言つても前後があるかもしれない。だから、願いを興された。我が国のもろもろの大菩薩は一念のあいだに全世界

に出て、諸仏を供養し衆生を教化するように。と。動かずして、一念一時に遍く至る。ように。迷う人があれば、この人を前にして次の人を後にするということはない。同事である。同時である。

①と②の違い

①は不動にして遍く十方世界に至る 前後がある。

②は一時に至る 前後がない。

いつでもどこでもすべてを照らして下さっている